# 台湾における大衆の死後観の分析

## ——「台湾における宗教体験の比較研究」の二〇〇九年の試験調査資料をもとに

蔡彦仁
台湾国立政治大学宗教学大学院院長

## はじめに

「死生学」は、欧米の学界に端を発するもので、四十年以上の歴史を有し、臨死・死・死後世界の様相などを詳細に研究する学問である。また、そのテーマは多岐にわたっており、宗教・哲学・文学・芸術に関連し、先進のターミナルケアや精神治療をも包括するなど、学際的で、きわめて総合的な学問領域である。台湾では、前ペンシルバニア州立大学傳偉勳教授が、一九九〇年のはじめに台湾に戻った際に、この新しい学問領域を提唱し、学界に大きな反響が起こった（傳偉勳[1993]）。そして、その後、死の意義や死後世界の探求に関して、数名の学者が興味深い指摘を行った（段德智[1994]、蒲慕州[1995]）。

台湾の学者の死後世界の研究に関しては、おおよそ、以下の二種に類型化することができる。一つは、文献学的な考察であり、もう一つは、民俗学や人類学の手法にもとづいたものである。文献学的な考察では、史

書や文献・考古文物などに対象が偏っており、その中に反映された中国古代の死後観の考察が中心である（余英時[1987]、Yü[1987]、蒲慕州[1995][2005]）。民俗学の手法にもとづいた研究は、特定の地域や儀式を観察・分析の対象とし、現代の台湾の民衆社会で今まさに起こっている現象を明らかにすることを中心としている（黄文博[2000]、陳明莉[2002]、林清泉[2004]、江志宏[2005]、龔萬侯[2005]）。これらの研究によって、我々は思想背景に関する非常に重要な知見を得ることができる。例えば、漢代以前に中国には死後観が存在しており、最も中国的な要素は連綿と続いていた。これと、漢代に仏教が中国に流入して以降の、各宗教の要素が融合することによって形成された多様な死後観とは異なっている。また、ある学者のフィールドワークは、現代の台湾の各地でどのように喪葬儀礼が行われているのかを描き出しており、これによって我々は、一般民衆がどのように死や死後世界と向き合っているのかをうかがい知ることができる。

蔡彦仁氏

しかしながら、これらの研究は、中国や台湾の漢民族の伝統的な死後観のある一側面を捉えてはいるものの、必ずしも、その他の重要な問題を考慮しているとは言い難い。

例えば、教育水準が著しく上昇した現代の台湾において、死後の世界の存在を依然として信じている人が、いったい何人いるのか。男女の性差によって、死後観は違うのか。

仏教や道教・民間信仰が台湾では主であるが、台湾の人々がみな同じ死後観を持っているのか、あるいは、それぞれ異なっているのか。差異があるならば、信仰している宗教という要因以外では、家庭の収入や年齢なども関係があるのか、など。上述

のような問題は、さきの文献学や民俗学の研究者の関心の対象ではない。しかし、社会学に携わる研究者の関心は、まさにそこにある。現代の台湾の学界において、社会学の見地からの研究成果は多くはない。ただ、代表的なものとして、瞿海源教授の一連の研究を挙げることができる（瞿海源[1997][2006]）。[1]

瞿教授は、社会学者であり、彼の宗教研究のベースは「宗教の世俗化」の理論である。彼は、社会の著しい発展にともない、人類の理性もますます高められ、超自然的な世界はその意義や影響力を失い、宗教信仰や宗教に関する活動・思考・制度なども、徐々に人間生活の範囲から離れるであろうと指摘している。彼がもとづいた「台湾社会の変遷の基本調査」によると、台湾の宗教は「世俗化」に向かっているとされる（瞿海源[1997:17, 36-37]）。一九六〇年から一九七〇年代にかけて欧米で流行した「宗教の世俗化」（secularization of religion）は、二十世紀の末までずっと、欧米の宗教社会学におけるメインテーマであり、当時の論攷は、今なお、多くの学者によって、称賛され、軌範とされている（Berger [1967] [1980]; Luckmann [1970]; Martin [1969] [1978]; Wilson [1966] [1982]）。そして、現在、欧米の学会で活発に討論されている「理性選択」（rational choice）や「市場論理」（market theory）も、「宗教の世俗化」の概念の発展上にあると見ることができる（Bruce [1999] [2002]; Casanova [1994]; Stark and Iannaccone [1994]; Stark and Finke [2000]）。しかし、「宗教の世俗化」の理論が提起されたのは、あくまで、欧米社会が発展してきた経験と実例にもとづくものであって、その理論が普遍性を有するものであるのか、世界各地で適用しうる法則であるかどうかに関しては疑問である。ここに問題があるのである。「死」や「死後世界」に関しては、宗教史や比較宗教の角度からの考察のみを取り上げてみても、「死」や「死後世界」は、実際には、人類の「生命」に対する態度や各人の人生観と親密な関係があるもので、異なった民族や国家・社会・習俗・制度・文化・宗教などの影響による差がきわめて大きいということが、最近の研究によって明らかにされている（Hayslip and Peveto [2005]; Kramer [1988];

Loewe [1979/1994], [1982/1994]; Morris [1992]; Smith [1987]; Van Baaren [1987]; Watson and Rawski [1988])。特に、最近の数名の学者は、華人社会の宗教を研究して、以下のような指摘をしている。大陸が「改革開放」の発展を遂げたこの三十年、各種宗教の活動は、衰える勢いを見せないだけでなく、むしろ盛んになり、伝統的な宗教観念は、依然として多くの人々の生活や考え方をつかさどっている（Yao [2007]; Yao and Badham [2008]）。経済がめざましい発展を遂げ、教育水準が大幅に上昇しても、香港の喪葬儀礼は、依然として千百年以上昔の宗教の伝統にもとづいて、執り行われている（Lai [2006]; Yin [2006]）。したがって、我々は、客観的な研究の成果を拠り所に、今一度、「宗教の世俗化」の理論の普遍性に関して、子細に考察する必要があろう。本論文は、上記の様な背景の下、「宗教の世俗化」の問題点に対し、台湾を研究対象として、一つの回答を提示したいと考えるものである。

## 研究背景

筆者とその他の四名の学者は、これまで三年にわたり（二〇〇八～二〇一〇年）、「台湾における宗教体験の比較研究」（A Comparative Study of Religious Experience in Taiwan）という共同研究を行ってきた。本計画は、学際的に、宗教学や社会学・心理学・政治学など、様々な分野の人材によってプロジェクトチームが構成され、アンケートとインタビューという手法を採っている。そして、台湾における民衆の「宗教体験」のデータベースを構築し、その後、参画した研究者による整理・比較・分析・解釈などを通して、台湾の「宗教体験」の諸相、およびその特徴や意義を描き出すことを試みるものである。二〇〇八年の末に開始してから、現在までに、文献の確認・アンケートの作成・試験インタビューの段取りに関しては、すでに済んでおり、四四八八件の正

式な調査対象に対するインタビューも、二〇〇九年の十月までに済む見込みである。

この計画のアンケート調査は、宗教問題と民衆の考え方の学術的調査であり、客観的かつ体系的な方法を採用している。そして、宗教信仰の有無を問わず対象に含め、科学的かつ厳密に、そして実証的に行うものである。研究対象は、内政部戸政司の戸籍資料にもとづいた台湾の十八歳以上の住民であり、研究方法は、「規模比例サンプリング」（Probability Proportional to Size, PPS）という方式を採り、サンプルを抽出する。アンケートに関しては、具体的には、台湾の国籍を有しており、一九九〇年十二月三十一日以前に出生した（十八歳以上）人々を対象とすることが原則である。[2] まずは、台湾の戸籍資料を、アンケートのサンプル名簿（sampling flame）とし、「サービス業人口百分率」、「工業人口百分率」、[3]「十五～六十四歳人口百分比」、[4]「六十五歳以上人口百分比」、[5]「専門学校以上の教育人口百分比」、[6]「人口密度」などの指標を用い、台湾の行政区域（郷・鎮・市・区）を七段階に分けた（侯佩君等［二〇〇八、14-21］）。この区分では、第一・第二段階が北部地区であり、第五・第六・第七段階が中部地区であり、第三・第四段階が南部地区である。そして、「有意選出」の形式で郷・鎮を選び出した後、さらに「等比率選出」の方式によって、村や被験者などのサンプリングを進めた。具体的には、まず、行政区分ごとの人口の多寡に応じて、等距離サンプリングを利用して系統だてて村を選出し、その後、前述の「等比率選出」の方式にもとづいて、その村々ごとに、一定数の個人サンプルを抽出するというものである。[7]

この計画のアンケート項目は一二四題ある（最終稿では一二一題に改められた）が、内容は、個人の基本資料以外に、以下の六つに大別することができる。「宗教体験Ⅰ：力」、「宗教体験Ⅱ：人生」、「宗教体験Ⅲ：夢」、「宗教体験Ⅳ：超常現象」「観念と行為」「理念と信仰」。なお、このアンケートは、原則として、宗教社会学が提示した、「信念」（brief）「行為」（behavior）「帰属」（belonging）の三つの概念によって宗教現象を考察する

という方法を前提としているが、実際には個人の宗教体験を調査の中核としており、質と量とをともなった研究の特色を有している。

本計画は、二〇〇九年六月に試験的に実施された。アンケートの送付総数は三二七通、インタビュアーの実地調査を経て回収されたものは一〇八通、成功率三三％である。数値的にはそれほど高くはないが、サンプリング方法を考慮すれば、回収された意見には、台湾の代表的な性質が現れているといえ、我々がこれをもとに考察を進めることには、非常に意義があろう。

## 資料の分析と考察

「台湾における宗教体験の比較研究」の計画は、日常と非日常との相克など、台湾の人々の様々な宗教体験の理解を目的としている。アンケートには、「死」や「死後世界」と直接関連する項目は、決して多いわけではないが、ただ、以下の三つのテーマに関する問いと答えは、我々が台湾の一般民衆の死後観をうかがい知る手がかりとなるであろう。

### 一――「宗教体験Ⅰ：力」

第八問：「ある人は、自らの人生の中で、なんとはなしに、人間がコントロール不可能な力の影響を感じた経験がある。あなたは、そのような力を感じた経験はありますか。もしあるならば、以下の選択肢から、経験したその力を選んで下さい。」

①天命・天意
②仏・菩薩
③因縁
④天主・上帝・イエス・聖霊・聖母マリア
⑤祖先、あるいは先人
⑥鬼や霊（鬼霊）
⑦自らの運命、あるいは運
⑧道、あるいは天道
⑨気
⑩その他の土着的な神（媽祖・関公・王爺・祖師爺など）
⑪上記以外

この問題では、「⑤祖先、あるいは先人」と「⑥鬼や霊」が死後世界を反映している選択肢であり、民衆の死後観と密接な関係があると考えられる。

## 二――「宗教体験Ⅲ：夢」

第三十四問：「ある人は、変わった夢を見るという。以下に挙げた数種の夢のうち、あなたが見たことのあるものを選んで下さい。」

①神霊（天主・上帝・イエス・天使／仏・菩薩・観音・羅漢／神明・土地公・祖師爺）
②鬼や霊・陰霊・妖怪・サタン
③祖先、あるいは亡くなった親戚・友人
④宗教者（上師・活仏・師父・上人・点伝師・牧師・聖人）
⑤神秘的、あるいは特別な動物
⑥神秘的、あるいは特別な植物
⑦天国・地獄・仙郷・寺廟・教会・墓などの神秘的、あるいは特別な場所
⑧神秘的、あるいは特別なもの・アイコン（十字架・卍字・法輪・護符・宝剣・光線・ひつぎなど）
⑨かつて見たことのある情景
⑩上記以外

この問題では、「② 鬼や霊・陰霊・妖怪・サタン」と「③ 祖先、あるいは亡くなった親戚・友人」、「⑦ 天国・地獄・仙郷・寺廟・教会・墓などの神秘的、あるいは特別な場所」が、民衆の死後観と密接な関係があると考えられる。

## 三――「観念と行為」

第六十四問：「以下の説を信じますか。」
①神や霊・鬼・妖怪などはこの世に存在する。

②宇宙には絶対的な神がいる。
③誠意あれば何事も叶う。
④風水の善し悪しが個人や家庭に影響する。
⑤死後の輪廻。
⑥夫婦・親戚・友人関係は前世の因縁に依る。
⑦善因善果・悪因悪果。
⑧定められた日時に祖先をきちんと祭れば、その加護を得ることができる。
⑨拠り所のない霊は、孤魂・野鬼となり、さまよい続ける。
⑩重要な行事を行う際は、吉日を選択する。
⑪修行や修練によって、特別な力を得ることができる。
⑫霊媒（もしくは乩童）によって、魔除けを行い、病を治すことができる。
⑬気功によって、病を治すことができる。
⑭人の気は、修行を経て、さらに強められる。
⑮気が活発な人は、邪悪なものが体の中に侵入しない。

この問題では、「⑤死後の輪廻」と「⑧定められた日時にきちんと祖先を祭れば、その加護を得ることができる」と「⑨拠り所のない霊は、孤魂・野鬼となり、さまよい続ける」の三つが、民衆の死後観と密接な関係があると考えられる。

筆者は、まず、一〇八の有効なアンケートから、被験者の基本資料（〈表一：「被験者基本資料」〉）を整理

し、上述の三つの問題の回答と突き合わせ、人数の統計を採取した。そして、アンケートに記載された個人情報にもとづいて、性別・年齢・教育・年収の四項目を取り出して分析し、以下の結果を得た。

〈表一：「被験者の基本資料」〉によると、被験者は、男五十六人・女五十二人であり、およそ半々である。年齢に関しては、台湾の近代史と社会発展、つまり、国民党政府が一九四九年に来台してから一九七〇年以降の、農業中心の経済から輸出を中心とした工業社会への変容に照らして、二点（一九四九年・一九七〇年）を、合理的な年代区分線とした。それにしたがうと、被験者を以下の三つの年代区分に分類することができる。六十歳以上の高齢者（一九四九年以前出生、一八・五％）、四十～五十九歳の中高年（一九五〇～一九六九年出生、四六・三％）、三十九歳以下の青年（一九七〇年以降出生、三五・二％）。また、高齢者から青年までのこの三つの年代区分は、教育水準の区分とも、おおよそ重なり合っている。教育水準の区分は、六年以下の初等教育しか受けていない者（一七・六％）、十二年の中等教育を受けた者（四二・六％）、十三年以上の高等教育を受けた者（三九・八％）の三つの区分であり、これは台湾の経済成長と教育水準の上昇との相関関係を示している。各家庭の月収というと、四万ＮＴ＄（ニュー台湾ドル）～九万ＮＴ＄が多数を占めるが（二四・一％）、月収が四万ＮＴ＄以下の家庭も多い（二三・一％）。なお、プライバシーにもとづいて、収入状況を申告することを拒否した被験者も多い（三六・一％）。[8] 最も注目すべきことは、被験者の宗教の信仰に関してであり、無信仰はわずか二〇・四％にとどまる。反対に、信仰の有る者に関しては、その信仰は民間信仰や仏教・道教・キリスト教などであり、その総数は八〇％近くに達しており、現代台湾において宗教信仰のある者が依然として大多数であることを示している。

自らの人生の中で、人間が超自然的な力の影響を受けたと感じた問題に関しては、多くの台湾の人々は、そのような力は死後の世界より来るものと考えている。〈表二：「宗教体験Ⅰ：力」統計分析〉のデータによると、五四・六％にも達する被験者が、先祖や先人の影響を受けていないと考えてはいるが、一、二回程度経験したことがあるという人から常に感じるという人までを合わせると、四一・六％となり、数から見て少なくはない人々が、肯定的な立場を採っているといえる。この先祖や先人の影響と比べて、鬼や霊の影響を受けたと考える被験者は比較的少なく（二八・八％）、あるいは、きわめて大部分の人が鬼や霊の影響は受けてはいないと考えていると言え、これは、民族観念中においては、祖先や先人は（子孫を）保護的・プラスのものとされ、鬼や霊（家庭に属さず、祭られることもない死んだ人の魂）は破壊的・マイナスのものと見做わされていることによるのかもしれない。この種の力が、将来に影響を及ぼすのかという問いでは、祖先や先人に関しては、この種の力に対して肯定的である者と、かつてこの種の力を受けた経験のある者の比率は、約三八・九％であるが、鬼や霊に対して否定的な者は大多数にのぼる。これと関連して、興味深いことに、鬼や霊の影響を受けたと考える被験者（二八・八％）は、将来に影響を及ぼすのかという問いでは、多くの人がためらい、あいまいな態度を示したが、このことは、「知らない」「答えを控えさせて」（これらは合わせて「不詳」という項目に含めた）と回答する人が、「鬼や霊の影響を受けたかどうか」の問いと比較して激増する（「不詳」の数値が三・七％から一七・六％）することから、うかがい知ることができる。

祖先や先人の影響を受けたと明言する被験者のうち、男女比はほぼ同じ（四一・二％と四二・三％）であるが、鬼や霊の影響に関しては、男性の方がやや多い（三〇・四％と二六・九％）。年齢を比較すると、一九七〇年以降に出生した青年層のうちで、祖先や先人の力を体験・信仰している者は、他の層の比率よりも

高い。例えば、祖先や先人の影響を受けたという者の青年層の数値（四七・四％）は、六十歳以上の高齢者層の数値（四五％）、中高年層の数値（三六％）よりも高く、鬼や霊の影響を受けたという者の比率においても最も高い（青年層三六・九％、高齢者層二八％、中高年層一五％）。また、この二種の力（祖先や先人の力・鬼や霊の力）が未来に影響を及ぼすと考える者の割合にも、顕著な差異が確認される（青年層・中高年層・高齢者層の順に、祖先や先人の力がそれぞれ四七・三％、三八％、二五％、鬼や霊の力がそれぞれ三一・五％、一四％、一〇％）。このことは、台湾においては、年齢が若くなるにつれ、祖先・先人・鬼神（鬼や神）の力の存在をより信じるようになるということを示している。また、この年齢という一つの要因にもとづく差異と、教育水準の高低による差異とは、ほぼ同じ傾向を示しており、教育水準が高くなればなるほど、祖先や先人、および鬼や霊の影響をより感じるようになる。その一例として、初等・中等・高等という三段階の教育水準にもとづいて比較してみると、その数値は、青年層・中高年層・高齢者層の順に、それぞれ四八・八％、四一・三％、二六・四％、および三二・六％、三〇・四％、一五・八％となる。そして、それらの力が未来に影響するか尋ねたところ、その答えもほぼ同じであった。さらに、収入状況にもとづいて比較すると、収入が多い（四万ＮＴ$以上）者は、収入の少ない（四万ＮＴ$以下）者よりも、祖先・先人・鬼神（鬼や神）の力の影響をより感じるようになる。「不詳」の項目を考慮に入れなければ、〈表二：「宗教体験Ｉ：力」の統計分析〉の収入による三つの区分では、祖先や先人の影響を受けたと感じる者の割合は、収入の高い層から順に、五〇・一％、五〇％、三六％、また、鬼や霊の影響を受けたと感じる者の割合は、三九％、四二・三％、一六％、そして、それらの力の未来の影響に関しても、影響を肯定する者の割合は、低収入の層よりも高収入の層の方が多く、同様の対応関係を示していた。この発見により、「宗教の世俗化」の趨勢が、台湾においては決して事実ではなく、むしろ正反対であり、祖先、および鬼や霊の力を経験したことのある台湾の人の割合

は、社会の進歩や教育水準の上昇・経済の発展などに応じて増加しており、理性が高められても、「死後世界」はいまだ消え去ってはいないことが分かる。

宗教体験の調査では、「夢」の体験に関しても尋ねたが、もし「夢」が人の考えや思いを反映しているならば、「夢」は、人の深層心理をうかがい知る重要な手がかりであろう。「夢」の描写によって、我々は、被験者の心理活動を知ることができ、さらには深層に隠された心の葛藤を究明し、「死」や「死後世界」に対する世間一般の複雑な感覚やあいまいなイメージや、夢で見た景色を、よりはっきりと、そしてまた生き生きとしたものにすることができる。〈表三：「宗教体験Ⅲ：夢」の統計分析〉では、一〇八人の被験者のうち、死後世界における超自然的な存在、例えば「三十四―② 鬼や霊・陰霊・妖怪・サタン」など、それらを夢の中で見たことがあると答えた者の割合は、それほど高くはなく、わずか二七・八％を占めるのみである。同様に、死後世界と関連した場所、例えば「三十四―⑦ 天国・地獄・仙郷・寺廟・教会・墓」など、それらを夢で見たことのある者の割合も、わずか二六・八％である。なお、これらはすべて、「一度や二度」、および「時々」と答えた者の数値の合計である。しかし、「三十四―③ 祖先や祖先や亡くなった親戚・友人」を夢で見たことのある者の割合は、五八・三％にまで達しており、これは前述の二種の夢の数値の二倍以上である。この割合の高さは、台湾の漢民族が人間関係を重要視することと関係があり、特に、五倫の教導と祖先崇拝の実践に関しては、より多くの資料収集や様々な文化の比較研究を通じてはじめて知ることができる。

上述の夢に関する調査の中で、男女間の差異を比較すると、「三十四―② おそろしい陰霊・鬼や霊」と、「三十四―⑦死後世界に関連した場所」に関しては、両者の比率はほぼ同じである（男：三十四―②

三〇・三％と三十四―⑦二五％、女：三十四―②二五％と三十四―⑦二八・八％）ことが分かる。しかし、祖先や亡くなった親戚・友人を夢で見た者の割合に関しては、女性は七三・一％、男性は四四・七％であり、これは特に注目に値すべき数値である。興味深いのは、年齢を加味すると、三十九歳以下の青年層で、恐ろしい陰霊・鬼や霊を夢で見たことがある者の割合は、中高年層と高齢者層よりもはるかに高く、青年層・中高年層・高齢者層の順に、五〇％、一六％、一五％であり、同様に、死後世界に関連した場所を夢で見たことがある割合も、同じ傾向を示しており、順に四二・二％、二〇％、一五％となる。ただし、祖先や亡くなった親戚・友人に関しては、このような世代による差とは反対の傾向を示している。つまり、年齢が高くなればなるほど、祖先や亡くなった親戚・友人に夢で会うことがより多くなり、それを高齢者層・中高年層・青年層の順に示すと、七〇％、六〇％、五〇％となる。この高齢者層の高い数値に関しては、高齢者はそれだけ死との距離も近く、そのため、祖先や親戚・友人に夢で遇いやすいのではないかと推測できる。しかし、青年層が、中高年層・高齢者層よりも、おそろしい陰霊・鬼や霊、死後に関連した場所を夢で見る傾向が高いということに関しては、年齢が若い人個人個人の方が、「死」や「死後世界」の体験や知覚を、より頻繁で、そしてより複雑なものとして、懸念しているということがはっきりと分かる。この発見は、教育水準に関する比較からも、よく似た差異が確認されることから、裏付けられる。すなわち、教育水準が高くなればなるほど、教育水準の低い者より、「三十四―②おそろしい陰霊・鬼や霊」と「三十四―⑦死後に関連した場所」を夢で見る傾向が高く、高等教育・中等教育・初等教育の教育水準の三区分では、その数値は、順に、三十四―②：三九・六％、二三・九％、一〇・五％、三十四―⑦：三〇・二％、二八・二％、一五・八％となる。なお、祖先や亡くなった親戚・友人を夢で見る事例に関しては、教育水準の高低による差というのはそれほど大きくはなく、高等教育・中等教育・初等教育の順に、それぞれ六〇・五％、五四・四％、六三・二％となる。最後に、収入の

面から比較すると、経済状況の比較的よい者は、経済状況のよくない者よりも、「三十四―② おそろしい陰霊・鬼や霊」と「三十四―⑦ 死後世界に関連した場所」を夢に見る傾向が高く、同様に、高・中・低の三段階の収入区分によると、その数値は、順に、三十四―②：三三・四％、三四・六％、一二％、三十四―⑦：三三・四％、二三・一％、一六％となる。なお、同様に、祖先や亡くなった親戚・友人を夢で見る事例に関しては、収入の差による影響はあまり見られず、〈表三：「宗教体験Ⅲ：夢」の統計分析〉によると、その数値は、高収入から順に、七二・三％、五三・八％、六四％となる。

「宗教体験」の調査では、被験者の「観念と行為」に関しても行ったが、そのうちの三項目は「死」や「死後世界」と関連する問題であり、それらは、主観的な認識に属するもので、実際の行為とは必ずしも関係があるものではない。〈表四：「宗教観念」の統計分析〉によると、例えば「六十四―⑤ 死後の輪廻」という項目では、「一：強く信じている」「二：ある程度信じている」の項目を合計すると、被験者のうちの六七・六％が信じていることとなり、このことは、台湾の民衆が仏教の影響を強く受けていることを表している。同様に、七一・三％にも達する被験者が、「六十四―⑧ 定められた日時に祖先をきちんと祭れば、その加護を得ることができる」と信じており、この考え方が広く定着していることは、仏教思想の影響を除いた、台湾社会における儒教倫理の影響が強いことの証左となる。また、筆者は、この数字は、台湾の人々の「宗教信仰」の傾向を最もよく表していると考えている。なぜなら、〈表一：被験者基本資料〉を参照すると、台湾において何等かの宗教を信仰している者の数値から、少数のキリスト教信者とその他の特殊な宗教背景の者を取り除いた数値に、およそ相当するからである。その他、提起するに値するのは、さきに取り上げたことに関してではあるが、「祖先や先人の影響」を受けたと考えていたのは、被験者のうちの四一・六％であった（〈表二：「宗教体験

Ⅰ：力〉の統計分析を参照）。この種の体験は、誰しもが得ることができるものではないとはいえ、しかしながら、祖先の加護を信じ、また、その影響を受けるかもしれないと考えている者の数は、この「観念と行為」の調査の結果を踏まえると、むしろ、この数字よりもはるかに多いのではないかと考えられる。これは、台湾の人々の死後観において、「祖先」が非常に重要で特別な位置を占めていることを表している。また、「六十四―⑨ 拠り所のない霊は、孤魂・野鬼となり、さまよい続ける」という説に関しても、さきの二つの項目（「六十四―⑤死後の輪廻」、および「六十四―⑧ 定められた日時に祖先をきちんと祭れば、その加護を得ることができる」という説）と比較すると少ないとはいえ、信じている者の数は、ほぼ半数（四九％）に達している。男女を比較してみると、男性の六二・五％が、「六十四―⑤ 死後の輪廻」という説に賛同しているが、女性は七三・一％であり、この考え方が、女性の間でより普遍的であることを示している。「六十四―⑧ 定められた日時に祖先をきちんと祭れば、その加護を得ることができる」という説に関しては、男女間ではほぼ差は無く、それぞれ、七一・四％、七一・二％である。そして、「六十四―⑨ 拠り所のない霊は、孤魂・野鬼となり、さまよい続ける」という説に関しては、信じている男性（五一・八％）は、女性（四六・一％）に比べて割と多いが、このことと、鬼や霊の影響の経験に関して、男性の割合（三〇・四％）が女性（二六・九％）よりもやや多いという結果と比較する（〈表二：「宗教体験Ⅰ：力」の統計分析〉を参照）と、両者には同じ傾向があるといえる。年齢に関しては、死後観に関する前述の二つの調査結果とほぼ類似しており、年齢が若いほど、「六十四―⑤ 死後の輪廻」ということをより信じており、青年層・中高年層・高齢者層の順に、七一％、七〇％、五五％となる。「六十四―⑧ 定められた日時に祖先をきちんと祭れば、その加護を得ることができる」という説に関しては、むしろ、四十～五十九歳の中高年層が、際だって高い比率（七八％）であり、その次に青年層（六四・八％）、最後にやはり高齢者層（六〇％）となる。「六十四―⑨ 拠り所のない霊は、孤魂・野

鬼となり、さまよい続ける」という説に関しては、青年層・中高年層と高齢者層との差は、かなり大きい。その数値は、青年層・中高年層・高齢者層の順に、五七・九％、五四％、二〇％であるが、これは、戦後に出生した台湾の人々が、戦前の高齢者層の人々よりも、この種の説を信じていることを示している。高等・中等・初等の三つの教育水準の差によって考察してみると、「六十四―⑤ 死後の輪廻」を信じる者の比率は、高等・中等・初等の順に、六五・一％、六七・四％、七三・七％である。さきに述べたとおりであれば、年齢が若くなればなるほど教育の水準は高く、また、年齢が若いほどこの説を受け入れる割合は高くなるはずであるが、この問題に関しての調査結果は、さきのものとは正反対であり、前述の「三十四―③ 年齢が高いほど祖先や亡くなった親戚・友人を夢に見る」での結果（p. 10、および〈表三：「宗教体験Ⅲ：夢」の統計分析〉を参照）と同じである。しかし、中等・高等教育水準の人々が、「六十四―⑤ 死後の輪廻」説を非常に高い割合で信じていることには、疑いの余地はない。「六十四―⑧ 定められた日時に祖先をきちんと祭れば、その加護を得ることができる」と「六十四―⑨ 拠り所のない霊は、孤魂・野鬼となり、さまよい続ける」の両説に関しては、調査結果は、高等・中等・初等の順に、六十四―⑧：六五・一％、七六・一％、七三・七％、六十四―⑨：四四・二％、五四・三％、四七・四％であり、すべて中等教育水準の人々の比率が一番高く、次に高等教育水準の人々、一番低いのが初等教育水準の人々となる。ただし、整理してみてみると、三者の差は大きすぎるということはない。最後に、我々はこの問題を収入の差によって分析したが、収入が低い人々のうち七二％が「六十四―⑤ 死後の輪廻」を信じており、収入が最も高い人々のうちでも六六・七％が、収入が中間レベルの人々のうちの六五・四％が、この説を信じており、三者の差は大きくはない。「六十四―⑧ 定められた日時に祖先をきちんと祭れば、その加護を得ることができる」という説に関しては、信じる者の割合は、収入が最も低い層で八八％、最も高い層で七二・二％、その真ん中の層で六一・五％となり、収入が最も低い層の

比率が一番高い。「六十四―⑨ 拠り所のない霊は、孤魂・野鬼となり、さまよい続ける」という説に関しては、収入の高・中・低の各層の比率は、順に、四四・五％、五七・七％、四八％となり、この中では中間層が一番高い。このように、経済の差にもとづく比較では、台湾の人々の上述の三つの説に対する見方を知ることはできない。収入レベルの異なった三つの層が、三項目それぞれにおいて、最大値を出してしまっているからである。しかし、一つだけ明かなことがある。被験者の収入の高低によらずとも、大多数の人々が、「六十四―⑤ 死後の輪廻」、および「六十四―⑧ 定められた日時に祖先をきちんと祭れば、その加護を得ることができる」という二つの説を信じているということである。

## 暫定的結論

「台湾における宗教体験の比較研究」の計画は、今なお、進行中であり、我々は、二〇〇九年十月には、四四八八件の正式調査対象にインタビューを実施し、一五〇〇～二〇〇〇程度の有効サンプルを回収する見込みである。本論文は、一〇八件の試験的な事前調査にもとづいたものであり、サンプルの数に限りがあるのは明白であり、台湾における宗教体験や死後観を、必ずしもすべて反映しているわけではない。しかし、本論文は、死後観と密接に関わっているいくつかの項目を取り上げて検討したものであり、結果として、少しばかりの事実と特徴が、はっきりと浮かび上がってきた。以下の三点は、我々が今後、継続して考察していく意義のあることである。

第一：十数年来、台湾は「世俗化」の発展を遂げてきたにもかかわらず、現在、約八〇％もの人々が信仰

を有しており、また、それは彼らの死後観にも影響を及ぼしている。

第二：台湾の人々の死後観に関して言えば、性別と経済（収入）という二つの要因による影響は、あまり明白ではない。

第三：台湾の人々の死後観に関して言えば、年齢と教育という二つの要因による影響は、顕著である。年齢が若くなればなるほど、そしてまた、教育水準が上昇すればするほど、死後の世界を感じ、信じるようになるという傾向が現れていた。

これらの事実は、明らかに「宗教の世俗化」の主張と矛盾しており、我々に、「宗教の世俗化」の理論の普遍性や有効性に対する疑問を生じさせる。その他、我々はさらに問うべきである。このような特徴は、台湾に限ったものなのか。筆者は、近いうちに、範囲をより広げたインタビューの結果をもとにした、グローバルな比較研究を進めるつもりである。例えば、中国大陸のすでに完成した類似調査との比較を進め（Yao［2008］）、あるいは、社会や文化の台湾との差異がより大きな国家に関しても、同様に計画・研究を進め、比較・考察していく。筆者は、このようなグローバルな比較研究は、宗教の「世俗化」、あるいは最近の学者の提唱する宗教の「脱世俗化」（desecularization）（Berger［1999］）などの理論に対し、相当に有用な貢献ができると確信している。

［参考文献］

●中国語文献

余英時
［1987］「中國古代死後世界觀的演變」、余英時（著）『中國思想傳統的現代詮釋』、聯經、台北。
傅偉勳
［1993］『死亡的尊嚴與生命的尊嚴：從臨終精神醫學到現代生死學』、正中、台北。
段德智
［1994］『死亡哲學』、洪葉、台北。
蒲慕州
［1995］『追尋一己之福：中國古代的信仰世界』、允晨、台北。
［2005］蒲慕州（編）『鬼魅神魔——中國通俗文化側寫』、麥田、台北。
瞿海源
［1997］『台灣宗教變遷的社會政治分析』、桂冠、台北。
［2006］『宗教、術數與社會變遷』、桂冠、台北。
黄文博
［2000］『台灣人的生死學』、常民文化、台北。
陳明莉
［2002］『鹿港喪葬禮俗研究』、南華大學生死學研究所碩士論文、嘉義。
林清泉
［2004］『喪葬禮俗的傳統與演變：以宜蘭地區漢人為例』、佛光大學生命學研究所碩士論文、宜蘭。
江志宏
［2005］『台灣傳統常民社會的明幽二元思維——普度、祭厲與善書』、國立編譯館、台北。

龔萬侯

［2005］『死亡之歌踊儀式意義之探討：以台南地區為例』，南華大學生死學研究所碩士論文，嘉義。

侯佩君等

［2008］「台灣鄉鎮市區類型之研究」，侯佩君・杜素豪・廖培珊・洪永泰・章英華『調查研究：方法運用』，23，pp. 7-32.

●海外文獻

Berger, Peter L.

［1967］ *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*. Garden City, NY: Doubleday.

［1980］ *The Heretical Imperative: Contemporary Possibilities of Religious Affirmation.* Garden City, NY: Doubleday.

［1999］ Berger, Peter L, ed. *The Desecularization of the World: Resurgent Religion and World Politics*. Grand Rapids: Eerdmans.

Bruce, Steve

［1999］ *Choice and Religion: A Critique of Rational Choice Theory*. Oxford: Oxford University Press.

［2002］ *God Is Dead: Secularization in the West*. Oxford: Blackwell.

Casanova, José

［1994］ *Public Religions in the Modern World*. Chicago: University of ChicagoPress.

Hayslip, Bert and Cynthia A. Peveto

［2005］ *Cultural Changes in Attitudes toward Death, Dying and Bereavement*. New York: Springer Publishing Company.

Kramer, Kenneth

［1988］ *The Sacred Art of Dying: How World Religions Understand Death*. New York: Paulist Press, 1988.

Lai, Chi Tim

［2006］ "Making Peace with the Unknown: A Reflection on Daoist Funerary Liturgy," in Cecilia Lai Wan Chan and Amy Yin Man Chow, eds. *Death, Dying and Bereavement: A Hong Kong Chinese Experience*. Hong Kong: Hong Kong

University Press.

Loewe, Michael

[1979/1994] *Ways to Paradise: The Chinese Quest for Immortality*. Taipei: SMC Publishing.

[1982/1994] *Chinese Ideas of Life and Death: Faith, Myth and Reason in theHan Period (202 BC - AD 220)*. Taipei: SMC Publishing.

Luckmann. Thomas

[1970] *The Invisible Religion: The Problem of Religion in Modern Society*. New York: Macmillan.

Martin, David

[1969] *The Religious and the Secular*. London: Routledge & Kegan Paul.

[1978] *The Dilemma of Contemporary Religion*. Oxford: Blackwell.

Morris, Ian

[1992] *Death-Ritual and Social Structure in Classical Antiquity*. Cambridge: Cambridge University Press.

Smith, Jane I.

[1987] "Afterlife: An Overview," in *The Encyclopedia of Religion*, ed. Mircea Eliade. New York: Macmillan, 1987.

Stark, Rodney and L. R. Iannaccone

[1994] "A Supply-side Re-interpretation of the 'Secularization' of Europe," Journal for the Scientific Study of Religion, 33, pp. 230-252.

Stark, Rodney and Roger Finke

[2000] *Acts of Faith: Explaining the Human Side of Religion*. Berkeley: University of California Press.

Van Baaren, Th. P.

[1987] "Death," in *The Encyclopedia of Religion*, ed. Mircea Eliade. New York: Macmillan.

Watson, James L. and Evelyn S. Rawski
[1988] Watson, James L. and Evelyn S. Rawski,eds. *Death Ritual inLate Imperial and Modern China*. Berkeley: University of California Press.
Wilson, Bryan R.
[1966] *Religion in Secular Society*. Harmondsworth: Penguin.
[1982] *Religion in Sociological Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
Yao, Xinzhong
[2007] "Religious Belief and Practice in Urban China 1995-2005," *Journal of Contemporary Religion* 22 (2007), pp. 169-185.
Yao, Xinzhong and Badham, Paul. eds.
[2008] Yao, Xinzhong and Badham, Paul. eds. *Religious Experience in Contemporar China*. Cardiff: University of Wales Press.
Yin, Jing
[2006] "Death from the Buddhist View: Knowing the Unknown," in Cecilia Lai Wan Chan and Amy Yin Man Chow, eds. *Death, Dying and Bereavement: A Hong Kong Chinese Experience*. Hong Kong: Hong Kong University Press.
Yü, Ying-shih
[1987] "O Soul, Come Back!' A Study in the Changing Conceptions of the Soul and Afterlife in Pre-Buddhist China," *Harvard Journal of Asiatic Studies* 47 - 2, pp. 363-395.

[註]

1 瞿海源教授は、一九八四年から、五年に一度の大規模な「台湾社会の変遷の基本調査」を取りしきっており、その調査の範囲は、政治・経済・教育・人口・宗教やその他の領域を含み、宗教信仰・宗教的態度・宗教行為の調査は、その中の項目の一つに過ぎない。

2 サービス業の人口百分率＝サービス業就業人口数／総人口数
3 工業の人口百分率＝工業就業人口数／総人口数
4 十五～六十四歳人口百分比＝十五～六十四歳人口総数／総人口数
5 六十五歳以上百分比＝六十五歳以上人口総数／総人口数
6 専門学校以上の教育百分比＝十五歳以上の専門学校以上の教育人口数／十五歳以上の人口数
7 このサンプリング方式の説明は、「中央研究院人文社会科学研究中心調査中心」の呂佩蕙女史に、二〇〇九年四月二十一日に提供していただいたものである。
8 行政院の主計処の統計によると、二〇〇八年の台湾の一家庭の平均年収は、一〇九万九九四元であり、これを月収にすると、九万一六六六元となる。しかし、これは給与所得だけでなく、アルバイトなどのその他の収入源も含んでいる（http://win.dgbas.gov.tw/fies/doc/result/97/all/49.xls を参考）。アンケートの所得収入の資料と、主計処のものとには、明らかな差異があり、再度、お互い整理し直す必要がある。なお、本論文は、被験者が自発的に提出した額にもとづいて区分している。

（翻訳　中西俊英）